

発達障害の臨床から日常の連携へ

支援から共生への道

田中 康雄

Tanaka Yasuo

慶應義塾大学出版会

目 次

Contents

序 ————— 村田 豊久

前口上

Act 1

Act 2

2

12

治療する側から支援する側へ

精神科医になりたてのころ／支援についてのさきやかな学び／
支援と支援が重なるとき／学び合い、育ち合う

誰のための連携なのか(1)

「ネットワークを作りなさい」という先輩の助言／つなぐための積極性・能動性／
誰のための連携か、を考える

誰のための連携なのか(2).....

孤立から連携へ／スペシャリストとプロフェッショナル／地平線から、そこに佇むことへ／
共に立つ、終わらない舞台

Act 3

虐待に対して何ができるのか.....

ある家族との出会い／何もできない自分を恥じながら／
出会いはやり直しの機会でもある／目には見えない、『支え合いの力』

Act 4

信じることから.....

一度は信じてみるものの／訴えを突き放さず、受け入れてみる／はらはらと心配し続ける

Act 5

その一瞬を待つ.....

Act 6

止まらない自殺／エアポケット？　いえ、ただの無知／
自分のはいれる精神病棟作り／思春期外来の場で

Act 7

困惑感 そして関わることの覚悟.....

他者を理解するということ／相互理解に向けて／添い続けることを学ぶ／
困惑感を、診断の決め手から関わりの覚悟へ

58

49

42

29

20

孤独を乗り越えた自立

児童自立支援施設とは／幼き子どもが今ここに／
子どもたちに課せられた、「自立」という言葉／
今までの孤立に向き合う

Act 8

就学相談での親の思いから

就学相談について／就学相談の席で／さまざまな親の思い／
「就学相談」の居心地の悪さ

Act 9

不登校の子どもたちから学ぶこと

自宅で暴れだしたA君／感情を置き忘れてきたようなBさん／
先生に言つてほしかったことを語るC君／心因性の記憶障害を示したDさん／
自分の道を勝ち取っていく子どもたち

Act 10

聴き続けることから生まれる希望

話を聴く——実習生のころ／聴き続けること——新米医師のころ／
聴くことで生まれる希望

Act 11

96

86

78

67

一緒にいる、ということ

一緒にいられない？／一緒にいることで生まれてくるもの／
一緒にいることと、花咲く刻の準備

Act 12

自立つてなんだろう——親からの学び

特別ではない、ただ私が親だから……／普通に認めて褒めてもらいたい／
この子の真意を無視していいのか／「自立」を問い合わせ直してみませんか

Act 13

睡眠に課題を示した方々との出会いから

そもそもそのきつかけは……／夢遊病、眠り病……／診察室に来ると眠る人

Act 14

“ぎこちなさ”から気づいたこと

人の動きから見えてくること／仕事が身につくことと人の動き／
ある困惑から思ひ立ったこと／自分にぎこちないということ

Act 15

聞いてほしい、と思うとき……

東京のタクシーで／札幌のタクシーで／まつすぐな道の先は

Act 16

105

115

125

135

143

Act 21	Act 20	Act 19	Act 18	Act 17
親やきょうだいの思い ふた親の温度差／ひとり親の思い／きょうだいのこと	診断でなくその子の心を、関わりは日常の中で 当たり前の感覚を忘れていませんか／親だからこそ、できる」と、できない」と／この子の心に近づきたいから	ものさしを差し出し合う 教師の力／教師の葛藤／測り方を一緒に考えていく」と	診断名よりも大切なこと 相談室で／日常の支援こそ／診断についての家族の困惑／この子を丸ごと受けとめたい	僕がいることが許される世界を探して ただ、そばにいたあのころ／そばにいることが許される、という関係性／この世界の地平線の向こうにあるものをめざして
189	180	171	162	153

診断名に囚われず、それを活用するということ

Act 22

診断名を告げることへの躊躇／「発達」という予測不可能な前進への希望／
これからいかに生きていくか、へ／呪縛から、活用へ

何が正しいと言えるのだろうか

Act 23

部分的なサインよりも、その背景にある内面に近づく／この子が今どんな気持ちなのか

青い空の真下で「僕」から「あなた」へ

Act 24

“ひとりぼっち”からの変化／「僕」との対話から、「あなた」と対話ができるまで／
支えてくれる人がいるから耐えられる／「あなた」と手をつなぎたい、から始めたい／
さいごに

納め口上

216

208

198

前口上 *Prologue*

本書に収めた二十四の文章は「教育と医学」という長い歴史をもつ雑誌に、二〇〇六年七月号から二〇〇八年六月号までの二年間、連載したもので、村瀬嘉代子先生と村田豊久先生の各連載と同時に始まつたものです。稀代の臨床家にして文筆家のお二人に挟まれたことで、僕はとても緊張しました。

しかし、まあ、お二人がおられるのだから、僕は付録のような気分で書けばよいと、数回の原稿提出後に早々と楽観してしまいました。すると、二十四回もなにを書こうかと思いあぐねながらも、結局は、これまでの臨床や日常生活を振り返りながら、僕が感じ、考えてきたことを、ある程度正直に書き続けることで、幕を下ろすことができました。書いている側としては、楽しかったのですが、時々こんな僕の独り言のような世迷い言を読んでいただくのはいかがなものかと思うこともあります、どうか、僕のところだけは読まずに飛ばしていただければと、願うときもありました。ですから、連載終了後にまとめて本にするという話が具体的になつていくなかで、心のどこかで、本

本当にこれでよいのだろうかと心配しました。これは、現在も同じ気持ちです。

連載を読まれていた方は、お気づきかと思いますが、回の始めのころは、「私は」という表記で綴っていた文章が、徐々に「僕は」と表現されるようになり、ずいぶんと力の抜けた文章になつていきます。これは、いかに当初緊張していたかを示すのですが、今回一冊にまとめるにあたり、すこしでもバランスをよくしようと、全編に手を入れたとき、この「私」と書いていたところを「僕」に置き換えて、可能な限り全体のまとまりをはかりました。

感想については、読み手にお任せするしかないのですが、この本は、僕の個人的な過去や、臨床場面、日常生活で体験した事柄を拾い集めたものです。しかし、記載したエピソードは、それぞれが特定できないように、随所に修正改変を加えています。ですから、事実を忠実に再現したものではありませんが、僕がそれぞれのエピソードから伝えたい内容には、嘘偽りはありません。どこにでもある風景、どことなく重なるエピソードは、日常生活を送るなかで、僕たちの共通の世界の存在を証明してくれるものです。その一方で、読み手がほんのちよつとだけ、僕と異なる思いを抱くとしたら、日常のなかでの個人というかけがえのない存在感がそこにあるからでしょう。

それぞれの物語は、読むだけではなく、自らに振り返ったときに、生き返るもの。僕の僕だけの物語が、あなたの物語につながることがあるとしたら、望外の喜びです。

手にとつていただきまして、ありがとうございます。

今回、本にまとめるにあたり、村田豊久先生（児童精神科医師、「教育と医学の会」前会長）に、ご無理をお願いして、序を書いていただきました。児童精神科医をおぼろげにめざそうと思っていたとき、村田先生のご講演を拝聴する機会を得て、僕は、気持ちよく涙しました。今回、本になるときに、かなうことなら村田先生に序を書いていただきたいと強く願つたところ、思ひをかなえることができました。村田先生には、どのような感謝をしても足りませんが、本当にありがとうございます。

本書は、連載時から一貫して慶應義塾大学出版会「教育と医学」編集の西岡利延子氏に、全面的に支えられた末に、世に出ることができました。ありがとうございました。

一一〇〇九年七月

田中康雄